



花仙別縁



「花仙剣伝」プロローグ

S U I K O (八木原一恵)

ある日のこと、太乙真人の住まう乾元山金光洞に、珍しく、甲高い少女の笑い声が響いていた。

「いったい誰が来ているんだろう？」

弟子の哪吒太子は、師匠の姿を探した。

生き生きとした異相の少年神である。二つに結い上げた髪、白玉の顔。蓮をかたどった衣からのびる手足は、すんなりとしていながら力強い。動くと、ひらりと身につけている真っ赤な混天綾や、手にした槍と乾坤圏の輝きが目に残る。

呼び出されれば天軍の將軍として獅子奮迅の働きをする哪吒太子も、事がなければ、太乙真人のもとや父の托塔李天王のもとを行ったり来たりしながら、それなりにおだやかに暮らしていた。

下界は決して静かではなかったが、大きく天が動くほどの大事もなく、天界はいたって平安であった。仕事や修行の合間に行き来し、やれ誰の生誕を祝うの、花が咲いたの、宝物ができあがったの手に入れたのと宴会を開いては集まり、交友を楽しむのは神仙も一緒である。

声はどうやら奥の桃園のほうからしてくるようだ。

のぞき見ると、桃の木々の間に卓が出され、太乙真人が二人の少女と茶を飲んでいた。

濃い桃色の花が今を盛りと咲く花の下で、人間でいえば二人のかわいい孫娘に囲まれた老人が目じりを下げているといったところか。

片方は、頭の両側に丸く結った髪に桃の花の髪かざりをつけた、子供っぽさが残る少女で、菓をつまんだり、立ちあがって枝の花に息を吹きかけようとしたりと、ひとときもじっとしていない。濃い桃色の服をひらひらさせながら動きまわる様子は、蝶か、風に舞う花びらを思わせた。

もう一人は、緑の衣をつけ、髪をひとつに大きく結いあげ、蓮の花をかたどったかんざしをさしている。小さいほうのしぐさを目で追っては微笑み、太乙真人に静かに茶を注ぎなおす所作に、深い落ち着きを感じさせた。

「哪吒か、そんなところからのぞいていないで、こちらにきなさい」

太乙真人が払子でさしまねく。年頃の女の子に慣れていない哪吒は、きまり悪そうに出ていった。

「わあ、哪吒太子さまだ。はじめまして。あたしは桃花仙です」

小さいほうの少女が、語尾をのぼし、元気な声でいった。

「蓮花仙ともうします。以後お見知りおきを」

もう片方が深く頭を下げる。前髪に隠すようにしている顔は端正で、ものをいいいたげな黒目がちな瞳が印象的だ。

「縁（ゆかり）がないわけではなし、固い挨拶もあるまい」

太乙真人が笑った。

咲き乱れる桃花がひとときわ高く香っている中に、わずかに蓮の香りがまじったのは蓮華化身で

ある哪吒がいるからか、それとも、蓮花仙が手にしている蓮の花からであろうか。

「さて、哪吒も来たことだし、百花宝剣のことを、もう一度聞かせてもらえないかね」

「わかりました」

桃花仙がはずんだ声でいう。

「百花宝剣っていうのは、花仙の筆頭の百花公主さまがお作りになったすごい剣なんです。長さは三尺ぐらいで、色とりどりで、お花の模様がついていて……」

「なあんだ、かざりものかあ」

「かざりじゃなくて、本物の剣です。すごくよく切れるんです」

「ぼくの火尖鎗より？」

「宝剣だもの、きっとそうです。髪の毛を置いて、ふっと息をかけると切れるんです」

「ぼくのだってそのぐらいするどい」

「生木だってすばすば切れるんです」

「火尖鎗なら、切るだけじゃなく焼けるよ」

「石だって粉々にできます」

「石なら乾坤圏でゴツンだ」

「哪吒太子さまったら、武器を換えられては比較になりませんわ」

蓮花仙がくすりと笑った。

「とにかくとにかく、すごい剣なんです。なんといってもすごいのは、百花宝剣は、お花のしずくでできているんです」

桃花仙が花が咲く手ぶりをまじえる。

「花のしずく？ 花びらをしぼったら出てくるあれ？ 信じられないや」

「嘘なんかじゃありません。花仙たちが丹精こめて育てたお花のしずくを、それはそれはたくさん集めて、百花公主さまが八卦炉で煉って煉って煉って――何百年もかかってやっとできあがるんです」

「信じられないなあ」

花のしずくと剣というとりあわせが結びつかず、哪吒は半信半疑のようだ。

「哪吒、しずくは集まれば水となる。柔らかく包みこむ水は、だが、岩も削れば山を穿ちもする。なるほど、百花宝剣というのは、そういう威力を持った剣なのか」

太乙真人が感心したようにいった。

「です。お花のしずくだから、小さくして持ち歩くこともできるし、お花のように宙を舞わせることもできるんです」

「飛剣か。仙剣中の仙剣だけにできる技だな。すばらしいものができたものだ。宝剣会でも開いてお披露目をしてくだらないかね」

「お考えにはなっておられたようなのですが……」

蓮花仙が口ごもった。

「身の程をわきまえずに宝自慢をすれば災いをまねきかねませんので、お許し願いたいとのことでした。それと、花だけに、扱いが難しいとか」

「花なら花仙に世話をまかせればよいのではないか？」

蓮花仙が、はっと顔をあげた。

「ご教示ありがとうございます。今のお教え、きっとお伝えいたします」

「お師匠さまがそんなにほめるんだったら、たぶんすごい剣なんだろうけど、ぼくの持っているほうが強いに決まっているさ」

哪吒がフンと鼻を鳴らす。

「それは当たり前ですわ、哪吒太子さま。天軍の将軍の武器にかなうものなど、そうそうあるわけがないではありませんか」

それを聞くと今度は胸を張って、

「もちろんそう思ってたよ。でもさ、せっかくすごい剣だっていうんなら、まあ、ちょっとは見たいかもしれないな」

「本当の本当に見たいですか？」

「うん。まあ、ちょっと見たい」

「哪吒太子さまがそうまでおっしゃるなら……」

桃花仙が咳払いをした。

「桃花、あなたまさか」

蓮花仙が黒目がちな大きな目を見開いた。

「見たいなら、誓いを立ててくれなくっちゃ。これからはお友達になって、困ったときはきっと力を貸しますって。それと、ええと、剣を見たことはここだけの秘密にして、絶対誰にもいわないって誓ってください」

「わかった。誓う。今後、桃花仙が困っていたらきっと力を貸す。必要なときは知らせて。ぼくの力を借りたいて願い事を届けてくれれば、きっと助けに行くから」

「わあ、ありがとうございます。これで哪吒さまも同罪だわ」

桃花仙が、ぺろっと舌を出し、右手を袖の中に入れた。

次の瞬間、その手には、手の中におさまるかおさまらないかほどの大きさの、白っぽい丸いものがにぎられていた。

蓮花仙が、ひっと声をあげた。

「あなた、どういうつもりなの。お許しはいただいたんでしょね。勝手なことをして、もしなくしてもしたらどうということになるか」

「平気、平気。ちょっと持ってきただけだから。すぐに返せばわからないわよ。万一なくすようなことがあったら下界にだって取りもどしに降りるって」

桃花仙はそういうと、哪吒のほうを振りむいた。

「ほら、見てください。これが百花宝剣のひとふり、桃花宝剣です」

「剣丸か」

太乙真人が目を細めた。

「百花宝剣って、一本じゃないのか」

哪吒は変なところに引っかかっていたようだ。蓮花仙がそっと教える。

「ええ、百は比喩ですわ。たくさんの花の宝剣、さまざまな花の仙剣というあたりかしら」

「こうやって投げあげると剣に……」

桃花仙が手のひらを上にして剣丸を軽く投げあげた。

空気が一瞬、白く光ったかと思うと、宙に剣があった。細かくは見定められなかったが、花の宝剣にふさわしい洒落たつくりに見えた。

宙を舞った剣はすぐに落ちてきて、桃花仙の手に、すんなりとおさまるかにみえた。

だが、生きもののように手の脇をかすめ、地面に落ちたが、地につく寸前に急な角度で向きをかえた。そして、ひそんでいた龍が暴れだすように一気に速度をあげ、金光洞の外へ、さらには乾元山から彼方へと飛びだしていく。

さらに雲の間から下界へと、落ちたのか、それとも降りたのか。いずれにせよ、雲の間で光って下へと向かった。

「ちょ、ちょっと、もどって。もどってえーっ」

桃花仙の悲鳴に帰ったのは、こだまだけだった。

桃色のほおから血の気が引いた。

静けさの中、鳴き声をあげて、鳥が飛びたっていった。

じゅうぶんにぼんやりとしたあとで、桃花仙が涙をうかべてつぶやいた。

「とりかえしのつかないことをしちゃった」

「身の程をわきまえずに宝自慢をすれば災いをまねきかねないとおっしゃっていたのは、このことだったのかもしれないわね」

蓮花仙が首を横にふる。

「桃花仙どの、つまらないことを口になさったな。」

哪吒、おまえも。軽々しく誓いを立てればどうなるかはわかっていると思っていたが、まあ、おまえにとっては下界であればれる口実ができただけかもしれないがの」

太乙真人が払子をふった。

しばらくして、桃花仙が下界に流されることになり、うっかりつきあうなどと口を滑らせた花仙らが共に人界に生まれかわることとされた。

他にもすでに下界に落とされた者がいるという話はすでに公然の秘密だった。この件について天界がどんな思惑で動いているかは今のところ天帝の胸のうちにとどめられており、多くの者には知るよしもない。

天界はいたって平安、すべては事もないことになっている。

別れを告げにきた桃花仙に、哪吒は、

「そんなに泣かなくてもいいんじゃないかなあ。人間に生まれかわったときは何も覚えていないんだし。精一杯やっていれば、許してもらえる日がきつとくるよ」

桃花仙はあとからあとから涙がこぼれてしまうのを止めることができず、服の袖で何度もぬぐっている。

「ぼくが、困っていたらきつと力を貸すって約束したことは、どこかに深く覚えておくといいよ

。とにかく一生懸命がんばれば、きっと帰ってこられるって」

「ありがとう。だいぶ気持ちが楽になりました。でも哪吒さまが、なんだか楽しそうに見えるのはなぜかしら？」

「それは、ええと。きみがどんな人間になるのか考えると楽しいから」

「どんなだと思っているの？」

「たぶん、おしとやかの正反対なんじゃないかなあ」

桃花仙が、むっとふくれる。哪吒は、どうあつかっていいか困りながら、

「その……、元気で、はつらつとしてて、とっても苦しいときも、投げ出したいときも、最後まで、ぐっと笑ってがんばるんじゃないかな」

桃花仙が満面の笑顔で笑った。

「なんだか、がんばれそう。哪吒さま、ありがとう」

その笑顔がまぶしくて、哪吒は、人界に呼びだされてあばれる日が楽しみでしかたがない今の気持ちを、いいだすことができなかった。

乾元山の昼下がり、晴れた空にはわずかに霞がかかり、桃園の花は紅に近い濃い桃色に咲きみだれ、五蓮池の蓮は頭ほどある大きな花を水に映し、すべては事もない。表面的には。

桃花仙を見おくってもどった哪吒は、大きくのびをした。

花仙別縁（「花仙剣伝」——プロローグ——）

<http://p.booklog.jp/book/70220>

著者：SUIKO（八木原一恵）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/suikos/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70220>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70220>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ